

「底が突き抜けた」時代の歩き方 383

世界は「リベラルな帝国 - やさしい一極支配」をアメリカに求めているか

マス・メディアにネオコンの主張や論理が盛んに紹介され始めている。これまでにロバート・ケーガンやゲーリー・シュミットを通じてネオコンの考えを追ってきたが、雑誌や週刊誌に限定されず、いよいよ大衆的な新聞にまで彼らは登場して、自分たちの思想を展開しているのが目に付く。ネオコンの拠点となっている米誌ウイークリー・スタンダードで補助編集員を務める、米外交問題評議会主任研究員のマックス・ブーツが03・9・3付朝日新聞に登場しているのも、その一つである。米エール大学院出身の彼は34歳であり、同じエール大学出のロバート・ケーガンが45歳、ゲーリー・シュミットも写真で判断すると40代にみえることを考えると、ネオコンを主導しているのが若手の論客であることに気が付く。

ネオコンの論理を整理する意味で、マックス・ブーツの主張の骨子をここに抜粋してみる。

「9・11以前も、ネオコン（新保守主義派）は冷戦後も脅威がなくなる以上、米国はより積極的な役割を果たすべきだと主張してきたが、支持されず、「9・11で、雑誌に書かれていたネオコンの考え方が政策に生かされるようになった」

アメリカ帝国の目標は、「自由と民主主義を全世界に広げることだ。私が言う『帝国』は、領土を広げることが目的だった過去の『帝国』とは意味が違う。米国が世界の警官として、法の支配と自由、民主主義を擁護し、世界と敵対する核拡散やテロリズムと対決することだ。もっと簡単に言えば、ある国の運営を外国人にさせるのが『帝国主義』だ。例えばアフガンがテロリズムを育む土壌にならないように外国人に任せる。これは悪いことではなく、『リベラルな帝国主義』と言える。」

「米国が間違いを犯さないと言っているわけではない。これまで間違いは何度も繰り返してきた。しかし、総じてうまくやってきた。過去1世紀にわたってどの国よりも軍事力があつたが、抑制的に使ってきた。米国の外交は戦略的、経済的な利益も考えるが、利他的要素もかなりある。欧州諸国の外交政策には利他的な要素がないため、米国を理解できない。民主主義を広げるという利他主義は米国の戦略的利益にも合致し、矛盾しない」

「米国を『単独行動主義者』と呼ぶのは間違いだ。米国は助けが必要だし、何もかも自分でやる意思も資源もない。同盟国や国際機関をうまく利用しないとリーダーシップは発揮できない。逆に米国の重荷を分担することは同盟国にとっても利益になる。核拡散

や国際テロといった脅威の標的は米国だけではないからだ。ただ、国連安保理で合意を得るのは難しく、国連を通してできない時はイラク戦争のように当面の問題に絞った限定的同盟を使ってやることはできる」

「国連は、各国が米国に協力する際、国内を説得するためのお墨付きとして有益だ。使える時は使うべきだ。しかし、国連の許可がないからといって独自の行動を妨げられるとは思わない」

「世界の繁栄は、米国による安全保障の上に成り立っている。経済的繁栄と豊かな都市生活も、法と秩序の上に成り立っている。だれかが法と秩序を守る必要があり、それは米国しかない」

「この10年間は一極支配の10年だったが、終わる気配は全くない。我々に多極的支配を受け入れる余裕はない。いくつかのブロックに分かれたら悲劇的な結末を迎えることは、第1次、第2次世界大戦が教えてくれる。だから、『やさしい一極支配』が最善の方法だ。米国による一極支配は歓迎されるだろう。我々は自由貿易やりベラリズム、民主主義など他国がほしがるものを推進しているからだ」

『将来は中国が安全保障上の競争相手になるだろうが、まだ軍事的能力は何十年も遅れている。米国は出生率も経済成長率も防衛費も主要先進国の中で最も高い水準にあり、近い将来に米国の地位を脅かす国はない。多極支配の世界をつくるという夢などを見ていないで、この一極支配の世界でいかに生きていくか建設的に考える方が米国だけではなく他国にとっても利益になる』

この間、ケーガン^{かん}を始めとするネオコンの主張に接して、感じたことを率直にそのまま記してみる。まず論理が非常に単純で、問題のプロセスが省略化されているためにわかりやすいことである。彼らの主張は一言でいえば、冷戦終結後、米ソの二極支配構造が破綻したために世界は無秩序状態になり、世界で最も卓越した力をもつアメリカが、制度として最もすぐれた「米国流」の自由と民主主義を広げて世界を一極支配すれば、世界はうまくやっていけるということだ。同時に彼らの主張で感じるのは、傲慢ともいえるほどの揺らぎなき自信である。その自信を支えているのが、圧倒的に突出した軍事力であり、更に、非民主的などの国の国民も「米国流」の自由と民主主義を欲しているという認識である。アメリカがどの国の国民も憧れる自由と民主主義の国であり、しかも圧倒的な軍事力を誇っているとすれば、世界の無秩序状態を解消するために、今こそアメリカは「自由と民主主義を全世界に広げる」という目標にむかって軍事力を役立たせなくてはならない、という論理がやってくるのはある意味で必然であろう。

第二次大戦後の世界は40年もの間、ソ連とアメリカによって支配されてきた。そのソ連の支配が終焉することによって、アメリカがソ連の分まで支配することになっただけのことなのだ。どうせどの国もどこかに支配されなければやっていけないのなら、アメリカに支配されるのがベストではないか。マックス・ブーツのいう「リベラルな帝国

主義」とか「やさしい一極支配」とはそういうことなのだ。ネオコンのそうした世界観は、それと対立する種々の世界観を寄せ付けないように堅固に築かれており、その単純で明快な論理が9・11以降のブッシュ政権に受け入れられて、アフガン爆撃やイラク攻撃のかたちをとって展開されていったのであれば、ネオコンは現在の混沌としたイラク情勢をどうしても、アメリカが非民主的なイラクを民主化する際に付きまとう不可欠な試行錯誤とみなすのを避けられない。《イラクではテロが続き、戦後復興は遅れてい》ると訊かれて、マックス・ブーツはこう答えている。

「判断するのはまだ早すぎる。イラクでは、独裁体制を長年正当化してきた美辞麗句にうんざりした人々の声が広がっている。幻想がうち砕かれ始め、長期的には民主化への願望が強まるだろう。実際、イラクはアラブで最も自由な国になった。多くの新聞が生まれ、様々なデモが起きている。これは他のアラブ諸国には見られないことだ」

イラクはアラブで最も治安の悪化した国になって、国民は安全な生活を営むのが困難になっている。あるいは、米国が占拠していた小学校の校門前で学校の開放を求める住民のデモ隊に米軍が発砲し、住民ら約20人が死亡した事件や、バグダッドの連合軍暫定当局前でイラクの元軍人ら数千人が繰り広げた年金・給与要求デモに米兵が発砲し、元軍人二人が死亡する流血の事態に発展したことなどの新聞記事が、我々の許に伝えられている。「多くの新聞が生まれ、様々なデモが起きている。」ことを、「イラクはアラブで最も自由な国になった」ことの象徴としてみるなら、その「様々なデモ」に米軍が発砲する事態は、一体なにを表象するのだろうか。

ネオコンが自分たちの思想や論理に対して内省的でありえないことと、彼らの主張が他の異なる主張に耳を貸さないこととは、同等である。マックス・ブーツが、フセインの「独裁体制を長年正当化してきた美辞麗句」の「幻想がうち砕かれ始め」とみるのであれば、憧れてきたアメリカの自由と民主主義に対するイラク民衆の幻想も、イラク攻撃やその戦後復興のありかたを通じて「うち砕かれ始め」とみるべきではなかったか。我々が知りえている情報では、間近で接するようになったアメリカの自由と民主主義に対するイラク民衆の態度は複雑なものであった。彼はイラクの人々の間では、「長期的には民主化への願望が強まるだろう」というが、それは確信であって、「……願望が強まる」筈だとか、「強ま」らなくてはならないという性格のものにしかすぎない。そうでなければ、民主化するためのイラク攻撃の意図は崩れるからだ。

反省の欠如した国といわれるアメリカの、その反省の欠如の最深部からネオコンの思想や論理が生みだされてくるかのように感じられる発言が、《なぜ米国の政治にそこまで自信があるのですか。少し楽観的すぎませんか。》という問いに対するマックス・ブーツの応答のなかにみられる。

「米国が間違いを犯さないと言っているわけではない。これまで間違いは何度も繰り返してきた。しかし、総じてうまくやってきた。過去1世紀にわたってどの国よりも軍事

力があつたが、抑制的に使ってきた。米国の外交は戦略的、経済的な利益も考えるが、利他的要素もかなりある。欧州諸国の外交政策には利他的な要素がないため、米国を理解できない。民主主義を広げるという利他主義は米国の戦略的利益にも合致し、矛盾しない」

この論理も奇妙なものである。「これまで間違いは何度も繰り返してきた。」のであれば、その「間違い」はどのように是正されて今日に至ったか、と進んでゆく筈であるのに、「間違い」はあったけれども、「総じてうまくやってきた」から、「間違い」は是正されずにきたといっていることになるからだ。つまり、アメリカはこれまで「総じてうまくやってきた」国だから、これからも「総じてうまくやって」いくにちがいないよ、ということなのである。はたしてアメリカは、「総じてうまくやってきた」のだろうか。自己評価はそうであるとして、他からは「総じてうまくやってきた」とみるからには、たとえば、「米国流」の自由と民主主義を戦後社会に振る舞われた一人の日本人からすれば、あまりにも複雑な思いが充満している。問題は、「総じてうまくやってきた」と自己評価するアメリカ人のなかに、「米国流」の自由と民主主義を広げられる側の人々のさまざまな思いがほとんど汲み取られていかないところにあるのではないか。アメリカ人はあまりにも無頓着にすぎるのだ。

「リベラルな帝国主義」であれ、「やさしい一極支配」であれ、そう断固決意したアメリカを支えているのは、経済力でもなく、「米国流」の自由と民主主義でもなく、なんといっても超絶した軍事力である。圧倒的な軍事力がなければ、「自由と民主主義を全世界に広げること」など不可能だ。だから、マックス・ブーツはアメリカの膨大な財政赤字の中でも軍事費を二倍にすべきだと主張して、「軍事費は国内総生産（GDP）の3・5％に過ぎない。財政赤字の中で大型減税をするため、財政的に苦しいのはわかるが、今の軍事力では対応に限界がある。このままでは軍隊の海外派遣を減らすしかない。財政赤字を理由に軍隊を減らすのは無責任だ。アフガンやイラクへの復興支援も増やすべきだ」という。

もちろん、ケーガンやシュミット、マックス・ブーツらにみられるネオコンの主張に則った世界戦略を、国家目標として推進しようとするブッシュ政権の強引さや危うさを指摘、批判する声は盛んである。たとえば、桜美林大教授の加藤朗は03・8・28付朝日で、ネオコンが《国際社会を単に対立の場とみなしたり、力による支配を正当化するために「万人の万人に対する闘争」を持ち出すのはホッブズの誤読以外のなにものでもない》として、《ホッブズは『リヴァイアサン』で「万人の万人に対する闘争」とは記したが「万国の万国に対する闘争」などとは語っていない。ホッブズの関心は専ら、「万人の万人に対する闘争」を制約し、人間の存在の権利を保障する「人間の安全保障」のために社会契約に基づく近代主権国家を創出することにあつた》と批判し、こう続ける。《ホッブズは地上における至高の権力を備えた主権国家を、聖書に登場するこの世に比

類無き力を持った巨大な怪獣リヴァイアサンにたとえた。この主権国家の創設で国内社会の「万人の万人に対する闘争」は制約され、人間の生存の権利は保障された。しかし、多くの主権国家の誕生によってホッブズが想定していなかった問題が生じた。それは、国際社会で万国の万国に対する闘争が生まれ、国家の生存の権利が脅かされると考えられるようになったことである。この背景には、ホッブズによって「人格化」され「人工的人間」となった主権国家からなる国際社会もまた国内社会同様に「万人の万人に対する闘争」の自然状態であるとの仮定がある。

この仮定に基づく限り「人工的人間」としての国家の安全保障は、「人工的人間」同士の社会契約によってリヴァイアサンを超えるいわばスーパー・リヴァイアサンとしての世界国家を創設することである。その一つの試みが、カントが『永遠平和のために』で提案した「一つの世界共和国」である。カントはホッブズ同様に自然状態を戦争状態とみなしたが故に、自然状態を平和状態にするためのスーパー・リヴァイアサンを構想したのである。

しかし、国際社会をホッブズ的世界とみなすことには無理がある。「万人の万人に対する闘争」の前提となる平等性が主権国家の間には成立しないからである。主権国家の数が限られていた19世紀以前はともかく、20世紀以降、主権国家間の能力の不平等は拡大する一方である。自然は老若男女であれ人間の心身の諸能力を平等につくったとホッブズは主張したが、「人工的人間」である主権国家は人間がつくったが故に不平等になった。》

問題は、《主権国家間の能力の不平等》の拡大という人為的な矛盾をどう解消するかにあり、この解消を通じて国家間の戦争状態を平和状態にしていくことが問われているのに、ネオコンは、《アメリカの力による支配を正当化するために「万人の万人に対する闘争」というホッブズ的世界観》を必要としていると批判し、《現実がホッブズ的世界なのではない。ホッブズ的世界観で世界を見るから、現実がホッブズ的世界になるのである。力による支配を正すには、国際社会は自然状態とのホッブズの誤読を改めるだけでなく、ホッブズの対立的世界観そしてそのアンチ・テーゼとしてルソーが措定した協調的世界観の双方を止揚する新たな世界観の創出が必要不可欠である。》と説く。

アメリカの圧倒的な軍事力を支える経済的な基盤が《相当に脆弱な構造》であるために、アメリカの一極支配の困難さを指摘するのは、『諸君！』(03・7)掲載の『保守派が言っておくべきだったこと』の京大教授佐伯啓思である。フランスの人口・歴史学者エマニュエル・トッドの『帝国以後』の言い方を借りて、アメリカの軍事力行使は《せいぜい、イスラムの弱小国を脅かす「演劇的小規模軍事行動」でしかない》く、《アメリカの軍事力は一国の防衛に関しては大きすぎ、他方で世界全体の秩序維持には小さすぎるという中途半端なものであり、アメリカの軍事費負担は《一国の防衛に関しては》耐えることができても、《世界全体の秩序維持には》耐えられないほど《小さすぎる》

ということなのだ。

まず、《８０年代にアメリカは製造業の生産性の低下に見舞われ、製造業における国際競争を失っていった》という経済的な実態を把握しておかなくてはならない。その《製造業における失地を回復するために、アメリカは、９０年代にいわば戦略的に情報・金融部門にシフトし、グローバル経済を演出することで、これらの部門で比較優位を獲得した》。８０年代に《財政、貿易の“双子の赤字”を抱え》、製造業の生産が低下する中で、《通常ならばその国から資本は避難し、通貨価値は低落する》のに、基軸通貨としてのドルの《価値を維持し、ドルを環流することで貿易赤字と財政赤字をファイナンスしている》アメリカの場合は、８０年代から９０年代にかけて情報・金融の自由化、グローバル市場を形成して、《アメリカへ資本を流入させ、ドル価値を維持するメカニズムを作り出し》、未曾有の好景気を出現させた。

《世界中から（特に日本とヨーロッパから）アメリカに流入した資本は株式市場でブームを作り出し、それが資産効果を生んで消費の拡大をもたらした。消費性向がほとんど１００％という異常な事態の中で、アメリカの消費者はローンによってモノを買》い、《国全体でいえば、巨額の貿易赤字は、アメリカが、いわば世界中から借金をしてモノを買ったということ》だ。だが他方で、アメリカ市場にモノを売りつづけることで日本やＥＵはその過剰な生産能力を処理できたし、中国も急成長が可能になった。つまり、アメリカは世界から借金しつづけることで《経済的覇権を維持したのであ》り、《この借金を可能にしたものは、自由化され、金融工学などを駆使してかつてなく高い利潤を生み出すことを可能とした金融市場の形成だった。この自由な金融市場へ世界から流れ込む投資資金がアメリカ経済を支えたわけである。これは、財政赤字、貿易赤字、膨大な対外負債を持つ国としては異例のことである。》

当然ながら、この構造は脆弱なものであり、《もしも、アメリカ経済についての楽観的な見通しが崩れ、「世界の平和」を維持するためのコストが高かつき、双子の赤字がある臨界点に達するや、アメリカからの資本逃避が生じ》ることが予測され、そうなると、《アメリカ国債価格の暴落、株式市場の暴落、そしてドル暴落》が現実となって、グローバル市場に深刻な影響を与えるのは避けられない。佐伯氏がしたがって、《アメリカ経済は決して一極構造なのではなく、アメリカ経済自体が、他国の経済によって同時に支えられていると考えるべきなのである》というとき、彼はアメリカの圧倒的な軍事力による一極支配が、その経済的基盤を他国の経済によって支えられているという一極構造ではありえないという矛盾を見据えているのである。

佐伯氏はまた、今回のイラク攻撃に対する《フランス、ドイツ、ロシア、中国のアメリカ単独主義への強い反発》から、《確かに、一方でアメリカ中心の帝國的秩序、すなわちアメリカ一極構造が成立しつつある。しかし同時に、それから離反する動きも生じつつある。》ことに注目し、《現実には、アメリカという巨大な主権国家が作り出す帝国

と、古典的な主権国家の駆け引きの場としての「国際社会＝国家間の社会」の二重構造になっている》と指摘する。更に、イラク攻撃を機にアメリカに対するEUや各国の反発が深まると、《世界はアメリカ極構造どころではない。EU、ロシア、中国といった半帝国型の大国（地域）が、それぞれアメリカを牽制する。さらにイスラム諸国がアメリカとの間に軋轢を起こす。つまり、ユーラシアを大きく分割する複数の地域とアメリカの間の多極的構造ができると見ることも十分考えられるだろう。》と述べ、《確かなことは、アメリカの帝國的な秩序、アメリカ極支配というヴィジョンは決して確かではないということだ。もしそれが事実上できつつあるとすれば、それはきわめて脆い構造の上に成り立った危険なものである。あるいは、そもそもアメリカ極支配などというものはありえない、ということだ。》と締め括る。

ケーガンやマックス・ブーツらネオコンの主張を目にして募ってくる最大の疑問は、「自由と民主主義を全世界に広げる」ために、圧倒的な軍事力を行使するという手法についてである。その手法は民主主義にふさわしいだろうか。アメリカが軍事力を行使するのは、軍事力以外の方法で相手を説得するのは不可能だと思っているからである。実際、国益と国益が真正面からぶつかるなかでは、話し合いの交渉など何度繰り返しても進展はないだろう。だからといって、軍事的な衝突問題を解決するのは本質的な方法ではありえないし、野蛮に思われるから、どの国も埒が明かない交渉を重ねながら、少しでも事態を打開しようとするのだ。これまでの各国のそんな外交努力を前にして、アメリカは「自由と民主主義を全世界に広げる」という崇高な使命を果たすためなら、圧倒的な軍事力を行使したってかまわないと堂々と宣言するに至ったのである。

しかし、本当の意味での自由と民主主義であるなら、それらが広げられるためには民主主義的手法を求めるにちがいない。なぜなら、自由と民主主義はそれらが実現されるプロセスの民主主義的手法においてのみ姿を現すだろうし、反民主主義的な手法によってはけっして姿を現すことはありえないからだ。『帝国以後』の著者であるエマニュエル・トッドがいうように、自由と民主主義を広げるためのイラク攻撃によって、皮肉なことにアメリカはますます民主主義的性格を失いつつあるといわねばならない。

9・11以後のアメリカの振る舞いに対する、以上の疑念や批判以外にも、探すならいくらでも見出せるだろうし、それらの疑念や批判はけっして荒唐無稽なものではなく、的を射抜いているようにすら感じられたりもする。しかし問題は、それらの言説が当たっているかどうかということにはない。どんなに批判したり、疑念を挟もうとも、当のアメリカ自身が耳を貸す場所からはるか遠ざかってしまっているところに問題は渦巻いている筈だ。アメリカはもはや我々の言葉が届く場所には立っていない、ということを経験しておかなければ、アメリカに言及するどんな言葉も虚しいだろう。だが、このアメリカによって一片のためらいもなく剥き出されてくる事態について、我々はまづどのように理解すればよいのだろう。というより、我々はいまどのような根源的な問題

に直面しており、もう一度根底から我々の思考を組み立て直す必要があるのではないか。

9・11以後のアメリカを突き動かしているネオコンの主張の根底に流れているのは、「自由と民主主義を全世界に広げる」という善行のためであれば、戦争は肯定されるべきであるという思想である。つまり、戦争は必ずしも悪行ではない、戦争を通じて善行が施されるなら、その戦争もまた善行にほかならないという考えが、彼らの「リベラルな帝国」や「やさしい一極支配」の底には流れている。邪悪で専制的なフセイン政権下で民衆が抑圧状態にあるのを放置したままであることと、フセイン政権から自由と民主主義へ民衆を解放するために戦争を仕掛けるのとは、どちらがより善行であるのか、とイラク攻撃で彼らは問うていたのだ。そして交戦に踏み入ったのである。戦争を行う者たちには、いつも手前味噌で都合の良い理念や大義を掲げて戦争を正当化するという傾向や側面があるとしても、それにとらわれずに考えてみなければならないのは、戦争は絶対に否定されるべきものなのか、という問いである。幸せを望めば望むほど不幸せになっていくという現実世界である種の真実からすれば、戦争を否定すればするほど戦争が繰り返されていくというある種の真実も見据えておかななくてはならない。

《人間に備わっている支配への願望》という観点からの考察も迫られているのを感じる。作家の篠田節子との往復エッセー（03・3・3付産経）で、動物行動学者の日高敏隆が次のように書いている。それほど長くはないので、全文をここに転載しておく。

《まさに先週の篠田さんの文にあるとおり、この世に生き物が現れて以来、すべての生き物が目指してきたことは、生めよ、増えよ、地に満ちよ、だった。

ただし、それは「種族」とか「種」の意志とか意図によってではなく、一匹一匹、一本一本の生き物が自分自身の血の繋がった、（他人ではなくて）自分自身の子供をよりたくさん残そうとすることによってである、というのが今の生物学の考え方なのだ。

その結果、今、地球上にはさまざまな種の生き物がいて、少なくともみかけ上はバランスを保って共存している。人間もその中の一つだったはずだ。

問題は聖書がいみじくも記している「地を従わせよ」ということばである。これは大地を支配せよということではないのか？

旧約聖書はキリスト教から生まれたものであるが、宗教が何であれ、人間はその始まりからして天地を支配しようという願望をもっていたのではないかとぼくには思えるのだ。

天を支配するのはむずかしかったろう。大雨や洪水にはどうしようもなかったにちがいない。ノアの洪水のとき、人間は方舟を作^{はこぶね}って逃れるほかなかった。けれどそれによって人間は、いろいろな生き物を連れて生き残り、また世界に広がっていった。

大地は天より支配しやすかったかもしれない。人間は農業を始めて、多くの土地でその土地に合うように自分たちの食物を育種・栽培した。灌漑のため大規模・小規模の水路をひき、ため池やダムを作った。

それには多大の苦勞があったが、人間はそれに耐え、少しでも支配できたことに喜び

を感じながら生きてきたのだと思う。そしてそれが、われわれはやっぱり他の生き物とはちがうという人間としての自信を保たせてきたのではないだろうか？

他の生き物たちだってそれぞれに自信や自負心のようなものはあるだろう。苦労して食べ、生き、子孫を残していく喜びだって感じているかもしれない。でも天地を支配しようなどということは考えていないにちがいない。

人間もまた限られた土地で生き延びていくために心を砕いていた。篠田さんの言うとおりそこに道徳や宗教も関わっていたはずだ。エネルギーを費やして地形を変えたり大きな物を作ったりするのでなく、むしろ自分の生き方や考え方を自然に従わせる努力もたえずなされていただろう。

けれど人間が今このように世界を支配するに至ったのは、そういうおずおずとした感情によるものではなく、人間がもともと持っていた支配願望の結果だったような気がする。》

人間にもし支配願望が備わっているとすると、その支配願望は「一個の精子が卵子に出会うために繰り広げられる壮絶な闘い」にまで遡って考えられなくてはならないような気がする。もちろん、「精子の壮絶な闘い」は人間に限定されているわけではない。他の生命体にもみられるだろう。だから、支配願望はどの生命体にも刻印されているにちがいない。でも人間のように、《天地を支配しようなどということは考えていない》だろう。そこが他の生命体と人間が異なる点であるように思われるけれども、しかし人間の支配願望はそこにまで逸脱していっただけのことで、支配願望から切断されていない点では他の生命体と一つも変わりがないともいえるのである。

今の生物学の考え方に従えば、《一匹一匹、一本一本の生き物が自分自身の血の繋がった、（他人のではなくて）自分自身の子供をよりたくさん残そうと》して、《生めよ、増えよ、地に満ちよ》を目指してきた。人間も例外ではなかった。ところが、人間はそんな生き物の本能を踏み外して、天地を支配しようとする妄想に取り憑かれ、人間だけの社会を作るようになると同時に、生き物に反射的に備わる生理的な欲求からも遠ざかっていった。天地を支配しようとする妄想は人間が人間を支配しようとする妄想としても貫かれ、生物的本能から飛び出した支配願望がフィクションとして作り出された国家支配を通じて、人間の社会にまで触手を伸ばすに至るのは極めて自然な成り行きであった。《人間に備わっている支配への願望》を起点にすれば、アメリカの覇権的な野望がその支配願望の流れに収まるものであるのはいうまでもない。

人間に備わる支配願望には異質な他者への畏敬が確かに存在していたように思われる。たとえば、人間が大地を支配するありがたとは、《農業を始めて、多くの土地でその土地に合うように自分たちの食物を育種・栽培し》、そして《灌漑のため大規模・小規模の水路をひき、ため池やダムを作》ることだった。《それには多大の苦労があったが、人間はそれに耐え、少しでも支配できたことに喜びを感じながら生きてきたのだと思う。》

と日高氏が記すとき、その「喜び」には支配の達成のみならず、大地（の恵み）に対する感謝や畏敬の念が含まれていたことを見落としてはならない。自分たちに合わせて大地を改良すると同時に、大地に合わせて自分たちも改良されていくことの、大地と人間とのコミュニケーションの展開によって成果が生み出されてくることに喜びを感じ、その喜びのなかに、《われわれはやっぱり他の生き物とはちがうという人間としての自信》を見出してきたのだと思う。

人間は《天地を支配しようという願望をもってい》るから、《他の生き物とはちがう》のではない。つまり、支配願望の異質性において《他の生き物とはちがう》のではない。そうでなく、天地という自分たちとは異なる他者性をそこに認めて、天地を自分たちの思い通りにしようとする願望のなかに感謝や畏敬の念を根差そうとすることにおいて、《他の生き物とはちがう》のである。異質な領域に踏み込むことに対する畏敬の念を人間が抱かないとすれば、たとえ他の生き物にはみられない、天地を支配しようとする願望であったとしても、人間的な支配願望よりも動物的な支配願望をそこに多く覗き込むことになるだろう。ネオコンの主張や論理に最大に欠けているのは、その支配願望のなかに含まれなければならない筈の畏敬の念ではなかったか。彼らが「自由と民主主義を全世界に広げる」というとき、そこには自分たちより劣っている地域に「自由と民主主義」の種を蒔いて改良してやるという、思い上がった調子ばかりがみられて、アフガンやイラクという異宗教、異領土に対する敬意は全くみられなかった。

アメリカの支配願望が支配される側に対する畏敬の念を失っているという意味では、それはより動物的になりつつあるといえるかもしれない。若手の評論家の東浩紀が『動物化するモダン』を著して少し前に話題を呼んだが、学者の張競がその書評を行っており、次のように指摘していることに視線が引き寄せられる。《コンピューター化した社会ですべての情報が記号化され、データベースとして格納される。アクセスするたびに、検索エンジンを通して、読み込まれてい》くが、その《データベースの背後には「大きな物語」はない。》ユーザーはデータベースをさまざまに読み込んでプレーヤー（読者）として感情移入していくだけのことで、《データベースそのものが消費され》ていく。

《データベース消費への転換は、他者がいなくても充足できる社会の到来を意味する。その間、消費者は不可避免的に動物化する、と著者は説く。「動物化」はフランス哲学者アレクサンドル・コジエーヴの用語を踏まえた表現である。人間は他者への情念が介在する欲望を持つが、動物は生理的な欲求しか持たない。たとえば、食べるという欲望はたんに食物に向けられたのではない。愛、友情、充足、親密、贅沢といった文脈のなかで発散される。生理的な欲求は反射的な行為によって満たされるが、情念が介在する欲望は関係性を前提とする心理的満足を求める。本来、日常を包摂する社会関係のなかで、人間の欲望がはじめて満たされる。

だが、今日の社会では、「他者の欲望を欲望する」という文化性は徐々に薄れている。予見される欲望を満足させるために、記号化された対象がデータベースとして蓄積されている。マニュアルにしたがえば、欠乏が機械的に満たされる。社会的関係性が介在するはずの欲望が生理的な欲求になったという意味で、人間が「動物になった」のである。》

ネオコンが主張する「リベラルな帝国」や「やさしい一極支配」もまた、《他者がいなくても充足できる社会の到来を意味する。》というより、他者の不在によってこそ充足できる世界の到来を予見しているのだ。その間、人間は《不可避免的に動物化する》ことになるのだろう。もちろん、檻つきであるのは間違いない。もはや野に放たれて動物化していくような「野」はすべて失われてしまっているのだから。張競の書評は、《「動物化」はもはや受け入れるしかない。このメッセージは思想の「テロ」として十分衝撃的であろう。たしかに「大きな物語」の復権という妄想に取り憑かれるよりも、「動物化」したまま生きるほうがましなのかもしれない。》と締め括るが、その見方はネオコンの前では甘いといえるかもしれない。なぜなら、ネオコンのマックス・ブーツが、「多極支配の世界をつくるという夢などを見ていないで、この一極支配の世界でいかに生きていくか建設的に考える方が米国だけではなく他国にとっても利益になる」というとき、彼は米国の一極支配という《「大きな物語」の復権という妄想》のなかで、人間が「動物化」することを求めているからだ。

ネオコンの主張は、「米国流」の自由と民主主義を世界のどの国民も望んでいるという思い込みのなかで成り立っている。はたして世界中の国民は「米国流」の自由と民主主義を望んでいるのだろうか。この疑問が起こるのは、米国内ですら「米国流」の自由と民主主義に異議を唱える多数の国民が存在するからだ。「米国流」の自由と民主主義とはそのことに反対する自由も含んでいるといえるが、ネオコンの「リベラルな帝国」論では、反対は自由であっても、反対が決定権を持つことをけっして許容しないことを前提としている。反対が決定権を持つなら、ネオコンの主張そのものが崩れ去るからだ。イラクに対する軍事力行使は、「米国流」の自由と民主主義に反対する国家の行く末を象徴している。と同時に、米国内においても全国民に対して軍事力行使に匹敵するさまざまな法的締め付けを加えていくことも象徴している。

もし言葉の本当の意味で自由と民主主義が支配的な関係と対立しえないものであるなら、「米国流」の自由と民主主義による支配は、その自由と民主主義が本物ではないか、擬制であることを浮き彫りにしている。もちろん、「米国流」であろうとなんであろうと、いま我々が手にしている自由と民主主義が完全なものではない以上、どんな自由と民主主義も擬制であることを免れえない。しかし、問題はその擬制的な状態が克服されないまま、自由と民主主義を掲げた支配形態が強化されていくことにある筈だ。つまり、擬制が擬制のまま維持されていくのではなく、少しずつ真制へと拓かれていく通路を持たないところにある。それは、「米国流」の自由と民主主義が他者性を認めないところ

で成り立っている限り、駄目であり、他者性を受け入れていく度合いでしか、擬制から真制への通路は切り拓かれようがない。作家の島田雅彦は『サンデー毎日』連載エッセー（03.7.27）で、こう書いている。

《人が最も自然の脅威にさらされていたのは狩猟採集時代であるが、のちに自然をある程度人工化する営みとして農耕文明が発展する。しかし、天候の影響を受けて不作になったり豊作になったりするという意味では、農耕もまた自然の脅威にさらされる。

他者もまたこの私には制御できない自然である。自然の脅威を人工化し、自分の脳の中で抽象化して、管理しやすくする。そこに権力や国家が生まれる。他者の征服が文明のもうひとつの側面である。だが、いくら管理社会が徹底しても、他者は常識を裏切る自然でもある。いくら他者を法や掟で縛っても、絶えず裏切られることを覚悟しなければならない。なぜ相手が裏切ると思うのか、それは自分も裏切るから。自分もまた他者から見れば、信用の置けない他者であるから。脳生理学者の茂木健一郎氏によれば、赤ちゃんが他人の心を感じるのは裏切られた時だという。ぼくが泣くとママは優しくあやし、ミルクをくれるが、ある時、いくら泣いてもミルクをくれなかった。その時、ママは自分とは違う心を持っていると思う。ママに裏切られて初めてママを他者として意識する、というわけである。支配者と被支配者、政治家と国民の関係もママと赤ちゃんの関係に似ている。

誰もが法なり道徳なりを守って暮らしていれば、理屈の上では社会はよくなるはずである。だが、そうならないのは、道徳とか掟を破るからである。裏を返せば、掟とか道徳は、それを破る人がいるから必要なのであって、だれも破らないのであればつくる必要はない。支配者の立場からすると、人々が徳を求めて暮らせば社会はよくなるはずだが、そうならないことは支配者自身がいちばんよくわかっている。自分は欲に走って支配者に成り上がったのだから、ほかの人もそうする限り、永遠に世の中はよくなるはずがない。》

ネオコンの「リベラルな帝国」の狙いは、「自由と民主主義を全世界に広げること」にあるのか。それとも、そのことを通じて全世界を支配することにあるのか。前者なら、自由と民主主義の素晴らしさを損なう点でも、イラク攻撃はマイナスである。もし後者なら、《自分は欲に走って支配者に成り上がったのだから、ほかの人もそうする限り、永遠に世の中はよくなるはずがない。》だが、肝心な点は、ネオコンの主張や論理をいくら批判することができても、人間の社会が他者なしで充足できる、動物化しつつある社会へと向かっている潮流にネオコンの主張が乗っかっているところにあり、その潮流に爪を立てて抗することができなければ、ネオコンの論理のみを相手にしても何の意味もないのである。

2003年9月13日記

